4/20/2011

# ＜日本・アジアのキリスト教＞（演習・Seminar）

## A：日程・場所

演習日（前期）：4/13, 20, 27, 5/11, 18, 25, 6/1, 8, 15, 22, 29, 7/6,
7/13, 20, 27

場所：第三演習室

## B：テキスト

・波多野精一『時と永遠』(1943)（『波多野精一・全集４』岩波書店）

## C：演習の意図・目標

## D：研究の現状

## E：波多野精一

1．『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局）より

波多野精一（1877.7.21 ～ 1950.1.17、明治 10 ～昭和 25）

宗教哲学者、長野県（松本町）に生まれる。

第 1 高等学校から東京帝国大学文科大学哲学科へ、大学院で R.ケーベルに学ぶ。

1900 年、東京専門学校（現在の早稲田大学）講師となり、西洋哲学史を講義。04 年より、ベルリン、ハイデルベルク大学に学び、ハルナック、ヴィンデルバンドらに師事。帰国後、東京帝国大学で原始キリスト教を講義

1917 年京都帝国大学教授となり宗教学講座を担当。47 年に玉川学園大学教授に招聘。

『宗教哲学』(1935)、『宗教哲学序論』(1940)、『時と永遠』(1943)

2．『京都大学百年史／部局史編１』第２章より

3．宮本武之助『波多野精一』日本基督教団出版部。

4．宗教哲学形成過程

『西洋哲学史要』(1901)

『基督教の起源』(1908)

「スピノザ研究」(大学院卒業論文、1910)

「カントの宗教哲学について」(1913)

『宗教哲学の本質及其根本問題』(1920)：波多野宗教哲学プログラム

「歴史の意義に関して――ギリシア思想とヘブライ思想と」(1922)

西洋思想研究（哲学＋キリスト教思想）に基づく宗教哲学構築

哲学史研究者（古代ギリシャ哲学と近代哲学、特に観念論的系譜）

キリスト教思想研究者（聖書学、宗教改革、神秘主義）

現代宗教学（経験）、宗教研究の哲学的方法論的な反省

↓

宗教哲学

宗教を人間の生の営みにどのように位置付け、理性的な理解にもたらすか（哲学）

具体的な宗教経験に即した・それを正当に扱いうること（宗教的基盤・体験）

## F：ゼミの進め方

・4/13：オリエンテーション（前回）

・4/20：昨年度までのまとめ（「時と永遠」の部分）＋担当者確定
・毎回担当者が、テキストの内容を説明し、問題提起し（テキスト外の資料などを合わせて用いる）、議論を行う。担当者はレジメを用意する。残った問題は宿題とする（次回の冒頭で報告する）。
・必要な解説を行う（芦名）。
・成績はゼミでの発表によって評価し、夏期休暇の間にレポート作成してもらう。

## Ｇ：文献

＜日本の宗教哲学とその諸問題――波多野、有賀、北森――＞

https://sites.google.com/site/kyotochristianstudies/home/asia/journals
http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/139305

１．問題
２．聖書の神と形而上学の神との緊張
３．神の実在性と人格神
４．弱き神と聖書の神思想
５．展望

＜昨年度のまとめに代えて＞

＊「時と永遠」（1935）から『時と永遠』（1943）へ　＊＊＊

Ａ.『宗教哲学』の最終部分「五　時と永遠」（260-277頁）

cf.　『宗教哲学の本質及其根本問題』（1920）
・カント批判哲学に方法論的に依拠した宗教哲学
・本質論と諸問題（神と救済）
神：有神論、人格神
救済：神義論・悪、救済、歴史・神の国、不死不滅・永遠

Ｂ．ポイントとコメント

五〇（**260-267**）

１．問題設定
・「永遠性」という古くから論じられてきた問いに答える条件は
次の二点を念頭に置くこと。
第一：「宗教に固有特有なる」「観念であること」
第二：「「時」と極めて密接なる連関に立つこと」→「時と永遠」という問題設定
・哲学的人間学→宗教哲学→「生の二つの相」から問題にアプローチする。

２．文化的生（人間性）の基本形式としての「時」
（cf. カントあるいはハイデッガーよりハイデッガー的か？）

・文化的生：自己実現と時間性
自己実現の中心としての主体（自我）とその時間性としての「現在」
↓
客体としての他者＝可能的自己＝「将来」（「将来１」）
可能的自己の実現＝「現在」に入る（自己化）＝他者としての存在は消滅
＝「無に帰する」
＝「過去」

しかし他方、文化的生は自然的生の存立の基盤としており、他者が無に帰するならば、自己（「他者を自己のうちに取入れるに成功したる、独存する全能なる自己」）は、もはや存立できない（「壊滅に等しき」）。

↓　　（ cf. レヴィナスの存在論批判）

「実現されることによって壊滅に入る」＝「皮肉なる運命」

・文化的生における「時」：将来から過去へ、あるいは「過去へ向かう現在」「無に向かう有」

３．実在的他者と共同性における「将来」（「将来２」　cf.「かの将来」＝「将来１」）

文化の土台としての自然（→実在論の必要性）

文化は「実在的他者との直接的衝突を避けるための緩衝地帯」（万人の万人に対する闘争としての自然的生）であり、その限りにおいて、「実在者と実在者の共同」である。

↓

将来へと向かう時

中心である主体（自我）＝現在は将来（実在的他者）へと方向付けられる。

実在的他者は「将来」「彼方より来る」。

「「現在」の一契機に堕されること」を拒否

現在・将来１：「悲哀」

現在：将来２：「希望」　　（cf. Befindlichkeit、不安・実存主義）

４．生の二重性＝「時」の二重性

自己実現と他者依存　　（cf. In-der-Welt-Sein）

「現実的生の真の相」

＝「不徹底なる妥協」、「不安的均衡」

（世界の無根拠性は、日常性においては隠されているが、日常性は不安という存在形態を取る。）

↓

宗教的体験における「罪」：

「服従」を要求する他者に対する「反抗」　　（.人間にとって「法」は「服従」の要求となる。「命法」、カント）

↓

「罪」は歴史的出来事ではなく、存在様態である。

「いつも絶えず罪に堕ちて居る」

しかし、「文化」＝「罪」ではない。

他者との共同において象徴化された文化＝「神の恵み」

（有限性と罪責性との区別、自己中心性への固執としての罪 cf. シェリング→キルケゴール→ティリッヒ）

５．「過去＝無」に対して想定される異議

・「過去が現在を通じて将来に影響するは明白な事実」であるが、それは「「過去」の実在性を証明せぬ」。

（純粋な過去の実在性とは？）

↓

・アウグスティヌスの時間論をこの観点より解釈。
「現在の様態」としての過去（記憶 memoria）と将来（期待 expectatio）
観想的生の理想（他者に対処し安心に至る、哲学者の試み→イデアリスム）
・将来２：「彼方より来る」「迫り来る力」
これに直面して、「運命」「罪責」「悔い」といった事柄は成り立つ

**五一（267-275）**
６．救いとしての永遠、そして時
・「救い」：罪の克服・存在の転換・転向
将来（２）としての実在的他者に生の中心が移る
↓ （meta-noia）
他者の要求への「服従」の「決断」を通して「共同」は成り立つ。
＝「信仰」
信仰は、将来（他者）との共同を現在（主体）において体験すること。
将来に関わる限りにおいて「一種の希望」
↓ （終末論！）
将来と現在の二つの契機、信仰と希望という二つの様態。
・世俗は単なる世俗ではない。（ → 聖俗二分法（宗教と文化の二元論）の限界。）
「すでに或る意味において存在した実在的他者の体験」が宗教的生において徹底化する。

↓
「永遠」は「「時」の超越と同時に徹底」 （ cf. トマス natura / gratia
あるいは超越と内在
シェリング・ティリッヒ
永遠 Grund/Abgrund の二重性）
＝相互共同としての愛
神聖性と恵み

７．イデアリスムあるいは神秘主義に対して
霊魂不滅説
超時間性あるいは無時間性としての「永遠」

８．真の永遠
「時の直接的否定乃至超越ではない」
「時の根源としてそれを支持する実在的他者、との共同」
「罪の真中に罪人として生きつつ、同時に救われたる者であり得る」 simul / et
（cf. 宗教的体験として、ルター
論理として、象徴）
９．「過去の克服」
「過去の無くなった時」「現在と将来とのみより成る時」＝「永遠」
・「プロティノスの永遠の説」：「完全なる存在の生き方」「全体的生」「変化はない」「生の完成」「一切を包括する尽きぬ現在、窮り無き今」
↓
「極めて深き影響」
しかし、「人間性を超越せんとして結局人間性の絶対化にをはる」

「主体は」「客体として自我の前に観らるべく置かれた存在の一に過ぎなかった」

客体：可能的自己かつ実現された自己、質料かつ形相

「一者」

↓

「生が維持されるためには」

客体の他者性が必要である。客体の平面における内容的性質的他者性。

→nous：合一かつ他者性

不徹底

この意味での永遠もヌースも、「現に生きる自我」にとっては、客体を成さねばならない。つまり、「自己実現の契機を出でぬ客体を主体より切り離して固定させつつ、実在者の位を僭せしめたものが「永遠」であるという真理」

（フォイエルバッハの投影理論はこの点で妥当する。）

・一者も無に帰する。

「処理され享楽されてついに主体と共に壊滅する一個の客体」

「死に切れず生き切れぬ不安の旅を続けねばならなぬ「永遠」」

・「要するに他者、絶対的他者、を原理とすることによってはじめて「永遠」は成立つ」

永遠は「「将来」の方向においてのみ出会われる」、「将来に期待と信頼とを置く」

←→「自我の自己実現の一契機たる」「永遠」

↓

「自己実現」を克服され「象徴化」される。

他者の「恵みの言葉」と化する。

「現在になった将来」　（現在的終末論）

「自己を空にして他者の差伸す手を握る働き」　（働きを働く神、他者を能動化する働き）

受動性を経て・において能動性が成り立つ。

捉えられることにおいて捉える）

**五二（275-277）**

10.「未だ」の問題　（将来的終末論）

残る問い

永遠の体験にもかかわらず、現に時は存続する。

↓

・「高次の将来」「高次の希望」

「死を経由して達せられる生」「死後の生」

↓

「神の国・極楽・天国・其他類似の名称で呼ばれる所のもの」

・永遠＝愛の充実完成

愛の共同：一方的であるが、「それは相互共同を他者として創造する」

（一方的に基づく相互性）

・「感謝」「徹底的象徴化」「徹底的透明化」「見神」

（Visio Dei（至福直観）

神化 Theosis 、そして頌栄 Doxologia

残る問いは、十分な仕方で解明されたか？）